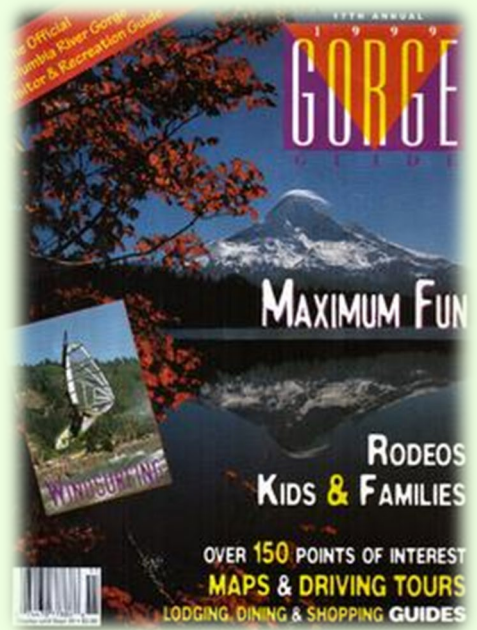


オレゴンの森に寄す

加藤 良一 2002年4月1日



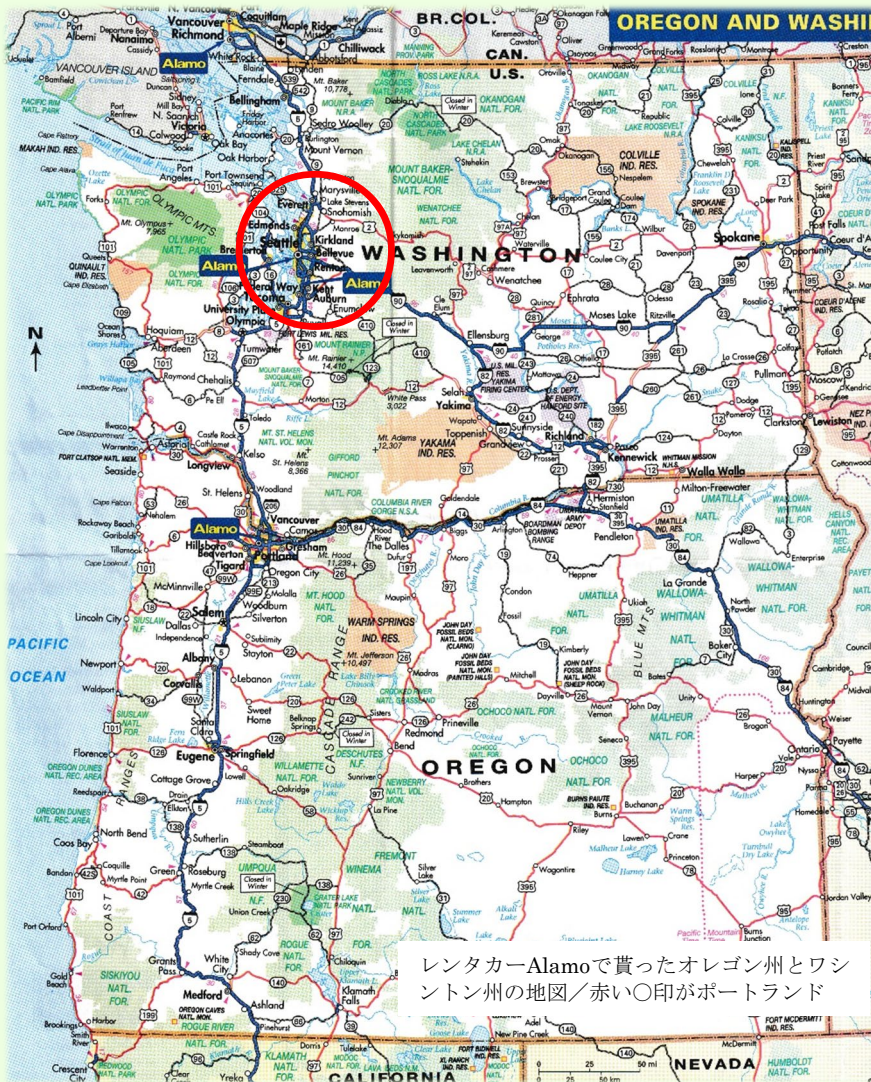
アメリカ西海岸オレゴン州ポートランドから国道84号線を経由し、ちょっと南下してから東に向かう26号線に入り、一路マウント・フッドを目指した。夏休み真っ盛りの7月31日、よく晴れ渡った最高の天気であった。

マウント・フッド(フッド山)は、オレゴン州の北に位置する標高1万1,239フィートすなわち3,372メートルと、ほとんど富士山と同じくらいに高い山である。余談だが、アメリカのこの度量衡は何とかならないものだろうか。

世界でメートル法を採用していない国は、いまやアメリカぐらいのものじゃないか。近ごろではメートル法も併用されているとはいうものの、まだまだパイント(約0.47リットル)や、クォート(約0.95リットル)などわけのわからない単位が残っている。これ

も文化だといわれてしまえばそれまでだが、アメリカ人は一見進歩的にみえても、こんな保守的な面も持っていることを見逃さないようにしましょう。

さて、アメリカの度量衡への苦情はひとまず脇に置いて、マウント・フッドへと向かうフリーウェイのんびりと走ることにした。ポートランドからマウント・フッドへの道はけっこう幅も広くて快適である。カーラジオから流れてくるカントリー・ミュージックを聴きながら、壮大なオレゴンの山あいを走り抜けた。アメリカをこんなに身近に感じるのは初めてだ。自分でハンドルを握りまさにアメリカの大地を自由に走ってこそ得られる体験である。この道ならカントリー・ミュージックがまさにお似合いだ。思わず鼻歌が出てくる。



グレシャム、そしてアルダー・クリークを抜けてからジグ・ザグでちょっと



寄り道をした。ジグ・ザグとはおもしろい地名である。いや地名というより、そのあたりの愛称かもしれないが、ちゃんと地図にも書いてあるから一応れっきとした場所なのだろう。ちょっと小高いところまで登るとマウント・フッド全体をよく眺められるいい場所があると、前日あらかじめ教えてもらったポイントである。ジグ・ザグへの入口を一度は行き過ぎてしまったが、折角だからとわざわざ引き返して登ってみることにした。

道幅の広い国道26号線で、信号のない交差点を左折するため、いったん中央の左ゾーンに入って対向車を確認、いざ左折しようとしたまさにそのとき、助手席のQさんがとてつもなく大きな声で「危ない！」と叫んだ。それまでのカントリーでのんびりしたムードが一瞬にして吹き飛んだ。こちらは、何が起きたのかさっぱり理解できず、おそらく目を白黒させていたと思うが、何だ、どうしたんだ、とパニックに陥ってしまった。それでもとにかくブレーキを踏んで周りを見回した。とりあえず車はセンターラインにちょっと先端がかかる位置で急停車した。

そのとき、対向車線を大きなトレーラトラックが、こちらに向かって真っすぐに突進してきた。一瞬の間を置いて、巨大なトレーラーは轟音とともにわれわれの左側を走り抜けて行った。

Qさんがいうには、ぼくが対向車をよく見ないで発進しようとしたので、びっくりしてしまったとのことだった。ぼくとしてはもちろん対向車は視線に入っていた——と思う。交差点に着く前に対向車線を確認し、距離からみてトレーラトラックが来る前に左折できる、と考えていた——はずだ。と、どうも記憶がいまひとつはっきりしない。じつにこころもとない話したが、どうやら突然のパニックで前後の記憶が飛んでしまったらしい。

Qさんに誤解されるような行動をぼくがしていたこともたしかだった。つまり見なくてもよいはずの左側の道路に首を曲げて確認していたからだ。それで対向車を確認していないとられたのかもかもしれない。左折するときわざわざ左側の道路、つまりはうしろから車が来るはずのない道路を確認することはなかろうということである。日本なら右折するとき、右側の道路をうしろから車が来ないかわざわざ確認するようなものだ。しかし、なぜかつい「左」を見たくなくなってしまうから怖い。そんなハブニングがあつてからは、いっそう慎重な運転になったことはいうまでもない。

さて、恐怖のひとつきからなんとか落ち着きを取り戻し、まずはマウント・フッド全体を一望できる峠で、最高の絶景を堪能し記念写真を撮ってふたたび山を下ることにした。戻りは国道までずっと下り坂である。ほとんどアクセルを踏むほどのこともない。静かな山の中で、ほとんどすれちがう車もなかった。遠くで鳥がさえずる声が唯一聞こえる音である。麓を目指して、のんびりと山を下りることにしよう。スピードが出過ぎないように、適度にブレーキを踏みながら速度を調節した。しかし、どうもさきからブレーキの



効きが悪いような気がする。たぶん気のせいだろう。でも、強く踏んでも、スピードが落ちない気もするし、ハンドルもさっきまでとは違ってスムーズには動かないではないか。おかしいぞと思いつつも、助手席のQさんに心配をかけたくない一心で、何気ない素振りをしながら、どうなっているんだ、とメーター類の並ぶパネルに目をやったり、シフトレバーの位置を再確認したり、ひとり首をかしげるばかりであった。

そうこうするうちに、メインキーがふと目にとまった。まさか...、まさか、エンジンがかかっていないわけなどなからうが...。とくにオートマチック車はエンジンがかからなければ動かないはずだし、坂道だからといって勝手に走ってしまうはずもない。とは思いつつも、ほかに考えられることがなかったので、Qさんに気づかれないように、そーっとシフトレバーをニュートラルにして、エンジンキーを回してみた。すると、軽い振動とともにエンジンがかかってしまうのではないかと、さっきまで走っていたのは、た



んに重力で坂道を転げ落ちていただけだったのか。エンジンがかかっていなければ、ブレーキだって作動しないだろうし、ハンドルだって動かないのは当たりまえだ。さいわいにもQさんはこのことに気がつかず。ぼくはほっとして、何もなかったような顔をして坂道を下りて行った。

それにしても対向車がまったく来なかったのは、とにかく不幸中のさいわいだった。途中で対向車をよけきれなかったら...、などと思いつくと、ちょっと冷や汗もののスリリングな経験だった。いまでもこのことはQさんには内証にしてある。

何も知らないQさんは、上りのときに目をつけていた小さい川に寄って行こうという。ぼくも川は好きだし、せつかくだから、ちょっと寄ってみようということになった。雪解け水だろうか、真夏にもかかわらず、冷たくて透明な水がたっぷりと流れていた。その流れに手をやると、ひとときすがすがしい心持ちになれた。ここならキャンプをはるには絶好の場所にちがいない。

うしろを振り向くと、Qさんが、川からすこし離れた木立に向かって、やおら用を足しはじめた。う〜ん、もうこれ以上のシャッターチャンスはない。Qさんの背後から、気づかれぬようにぬかりなくカメラのシャッターを切った。そのとたん、フラッシュがピカリと光ってしまった。まずい、と一瞬思ったが、Qさんは一向に気づく気配もなく、しばし法悦の境地をさまよっていた。

というわけで、あまりお目にかかれぬ微笑ましい写真ができた。ネガはぼくが押さえている。ネガをどう処分するかは、あくまでQさんしだいである。さて、この後ろ姿の写真にタイトルをつけるとしたら何がよさそうか。「オレゴンの森に寄す」などはどうであろう。きっと高値がつくにちがいない。



マウント・フッドは、ポートランドから60マイルというから約100キロ、車で1時間ほどの近い距離にある。山の中腹には、1937年に建てられた木造のティンバーライン・ロッジがある。ここは宿泊施設も備えた立派なもので、規模もけっこう大きい。周りにはたくさん雪が残っていて、上から滑り下りてくるスキーヤーやスノーボーダーが見事な曲線を描いて楽しんでた。

そのロッジの近くから、さらに上に向かってリフトが走っている。ここまで来て登らない手はあるまいと、さっそく6ドル払って乗り込んだ。予想どおり、上へ行くにしたがってどんどん寒くなってきた。こちらは真夏ゆえ半そでシャツ一枚だったが、我慢でき

ないほどではなかった。

リフトの終点は海拔7千フィート(2,100メートル)のところにあった。最初のリフトはここまでで、そこからさらに乗り換えて上に行くリフトがあるが、そちらは夏のあいだは動いていなかった。リフトを降りると広場があった。そのベンチに腰を下ろし、遠く遥かなオレゴンの山並に目を移した。すこし霞んではいたが、ちょうど真正面に見える山々が「スリー・シスターズ」(三姉妹)で、その左手に見える山が「バチェラー」(独身の男)だと、女性ばかり三人の家族連れから教えられた。Qさんは、三姉妹と独身男というシチュエーションが大いに気に入った様子であった。



マウント・フッドをあとにしたぼくたちは、つぎなる目的地コロンビア川のフッド・リバーという町を目指して、国道35号線を北へ向かった。コロンビア川は、オレゴン州とその北側のワシントン州を隔てる巨大な川である。パークデールやオデールといった田舎町を抜けてフッド・リバーへと向かう緩やかな山道はそれなりに狭い田舎道であった。フッド・リバーは、ポートランド市内からコロンビア川を大きな遊覧船がのぼってくる終点の港町である。こじんまりしているけれど、落ち着いた佇まいの町で、川からゆるやかな斜面が小高い丘に向かってずっと続いていた。

町に入っすぐのところまで車を停めた。歩いて散策してもたいしたことはない。せいぜい小一時間で回りきれそうな閑静な町である。ぐるりと町を一周して、あちこちの店を冷やかしながら、食事が出きそうな店を探した。ここまで来て和食や中華でもないから、この町らしい土地のものを食べることにした。そうと決まれば、何といってもコロンビア川で獲れるサーモンである。それとどうしても食事に欠かせないのがビール。この二つさえ揃えば、ほかには何もいらぬ。ぼくもQさんもこのテーマではつねに意見が一致している。

丘のもっとも高い一画にカントリーな雰囲気満載のいいレストランがあった。その店の前には、サーモンの泳ぐ姿を模した鉄のモチーフが飾り付けられていた。店内は、午後2時を過ぎているのにけっこうな客入りであった。メニューのなかから、さっそくサーモンと地ビールを注文。その店には中二階にあたるところにステージが据えられており、夜になるとジャズなどの生演奏をするというが、その時間まではかなり間があったので、聴くのはあきらめた。

腹ごしらえがすんだあと、コロンビア川のほとりまで行ってみた。大きな遊覧船が発着できる川幅の広さと深さは驚くほどである。日本ではあまり見られない規模ではなからうか。ウィンド・サーフィンのようなもので遊ぶ人々が遠くに眺められた。一休みするうち、そろそろ夕方の日差しになってきた。あまり遅くならないうちに帰路に着くことにした。

帰りはコロンビア川に沿って西へ一直線に進めばポートランドである。それまでの山あいを抜ける道とちがい、帰りは川を中心にした景色が続いた。このあたりの田舎町は、川によってたくさんの恵みを与られているのであろう。片田舎ではあっても、人びとは快適に、そして豊かに暮らしている様子があちこちに見てとれた。贅沢をいわずに、これはこれでじゅうぶんに楽しい人生を過ごせる楽園であろう。ポートランドへ向かう道路は、夕方の上り方向ではあったが順調に流れていた。とうとう流れるコロンビア川を右手に見ながら、その流れに合わせるようにゆっくりと一路ポートランド市内を目指した。

ポートランド市内の主要道路は、5号線と405号線がそれぞれ半分ずつ半円を形成するように環状道路となって取り巻いている。ちょうど山の手線が東京を一周しているように、ポートランド市内をぐるりと巡るこの環状道路はとても便利だ。

ところがこの便利な道路にも、



ぼくらのような新参者には問題があった。中心街から郊外のホテルへ戻ろうとして、なかなか思う方向へ行けずはずいぶんてこずる苦い経験もした。外国人とはいえ大の男が二人もかかって、地図と首っ引きになってもそんな調子である。ようは表示のわかりにくさが原因なのだろうと思う。

どうも見おぼえのあるところだなと思うと、いつの間にか元のところへ戻っていたのである。環状線の中だけを走っているうちは、どんなに行ったところで、しよせん市内に留まっているから問題ないが、ひとたび目指す方向へと思って曲がると、いつの間にか反対方向へどんどんと進んでいたりするから油断できない。

真夜中に、フリーウェイを目的地とは正反対の方向へ走っていることに気がついたときのショックは大きかった。もう1時間以上もムダに走ってしまったというやささと、なんでこんなに道路がわかりにくいんだといういらだちから、車中に重苦しい雰囲気がただよったこともある。

あの道路表示は何とかならないのだろうか。もっとも地元の人には誰も迷子にならないんだろうから、変えてくれと言えるわけがない。慣れる以外に方法はないようだ。



Back

「洗濯船」TOPへ



Home

Home Pageへ